降誕日　　言は肉となった　　２０２２．１２．２５．

クリスマスおめでとうございます。
今日は、読んでいただいた使徒書と、今の福音書を考えることにします。
今日の使徒書、ヘブライ人への手紙１章１～２節に「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」と書かれています。

預言者とは、神様の言葉を預かった人たちです。この人たちは神様の声を聞いて、それを人々に告げる役割を負っていました。旧約聖書の代表的人物として、私はモーセとエリヤを挙げたいと思います。

モーセは、預言者と言うより、律法を授かった人です。エリヤこそが預言者の代表です。旧約聖書のことを「律法と預言者」という言い方をすることがありますが、その場合「モーセとエリヤ」ということになるでしょう。この人たちが一緒に新約聖書にも登場するのを皆さんはご存知ですか。イエス様が３人の弟子たちを連れて、高い山に登ると、イエス様の姿が急に輝きはじめる、「変容の日」の出来事です。あの時は、イエス様を中心に、両脇にモーセとエリヤがいた、ということですね。

このモーセとエリヤは、旧約聖書では、４００年くらいの時代的な開きがありますが、面白いことに、二人とも同じ山に登っているんです。みなさんご存知でしょう。「シナイ山」ですね。

モーセは、エジプトを脱出したあとで、この山に登り、十戒を授かるのですが、人々が金の子牛を作ってしまうので、ガックリきて、十戒の板を割って砕いてしまいます。そのあと、３３章の終わりで、神様の栄光を見ようとしますが、神様は面白いことを言われます。
２１節から
「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

モーセは、神様の顔を見たかったのですが、後姿を見るだけだったというわけです。

それから４００年後、エリヤは、北イスラエル王国のアハブ王とその妃イゼベルとの戦いに疲れて、シナイ山まで逃げてきます。そして、神様に会おうとするのです。

列王記上１９章に登場します。１１節から
主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を／裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

エリヤはここで、静かにささやく声を聞いて、自分の後継者エリシャに油を注ぐために、山を降ります。

モーセもエリヤも、神様からの声は聞いて、それを人々に伝えることはできました。しかし、自分の目で見、手で触れることはできなかったのです。神様は、そこまでしか、ご自身を表わしてくださらなかった。

ところが、この終わりの時代には、イエス様を通して語られた、とヘブライ人への手紙の作者は語るのです。そのイエス様は、モーセやエリヤが聞いた、単なる言葉、声ではありませんでした。言は肉となって私たちの間に住まわれた。私たちが見たり、手で触ることができる存在として、神様を表わしてくださった、ということです。

もっと具体的に言いましょう。

神様は、旧約聖書という第１幕では、ご自身を表わすのに、「言葉によって、声を聞かせるだけだった。」ところが、新約聖書の中の最初、福音書の中に、ご自身を、ナザレのイエスという目に見える姿で表わしてくださった、ということでしょう。

ラジオがものを言葉と声だけで伝えるのとは違って、イエス様は、テレビのように姿を表した、と言ったらいいでしょうか。

あるいは、今はクリスマスのシーズンですから、神様は、私たち人類に、「私は君たちを愛しているよ。」というメッセージを、モーセやエリヤなど、預言者を通して語られたけれど、ただ言葉だけでなく、イエス様というプレゼントを与えることで、その愛を示された、ということではないでしょうか。

もう亡くなった、北関東の主教さんですが、これを面白い例えで言われました。
坂本九などがよく歌っていた歌に「幸せなら手を叩こう」というのがあります。「幸せなら手を叩こう」「幸せなら手を叩こう」「幸せなら態度で示そうよ、ほらみんなで手を叩こう」

神様は、私たちを愛していることを、言葉だけでなく、イエス様をプレゼントとして与える、愛を態度で示された、それがクリスマスではないか。

それを知った私たちも、やはり、その愛を伝えることが大切でしょう。１２月に入ると喪中の人からハガキがきます。そんな人たちに、年賀状を出すのは失礼かもしれませんが、私はそのかわりにクリスマスの便りを出すことにしています。

悲しみの中にある人たちに、私はその人のことを心にかけているんだと、何らかの形で愛を伝える努力をすることが、クリスマスを迎える私たちクリスチャンに、必要なことではないでしょうか。